

## 憲法と映画(114) 『ペリカン・ブルー～自由への切符～』

<かな>



1989年、それは昭和から平成に代わった年です。

私事で恐縮ですが、昭和天皇が亡くなり重苦しい雰囲気漂う中で、長女の誕生は明るい希望を感じて嬉し泣きしたことを憶えています。日本では大反対の国民の声を押し切って「福祉」目的の消費税3%が導入された年でもありました。お隣の中国では「天安門」事件が起きて民主化を求める多くの市民・学生が犠牲になりました。遠く離れたヨーロッパでは東西を分断していたベルリンの壁が崩壊し東西ドイツが統一しました。世界で起きた様々な事件のキーワードは自由と民主主義でした。

それから数年後、映画の舞台は90年代の東欧・ハンガリーです。西側諸国とソ連・東欧諸国を政治的・軍事的・情報面で隔てていたいわゆる“鉄のカーテン”が崩壊し、西ヨーロッパへの扉が開かれます。ハンガリーでも海外旅行が自由化され、たくさんの人々が“外の世界”に目を向け始めました。いくら地続きとはいえ国境を超える国際列車の切符は高額で、庶民にとっては手の届かない夢のまた夢…。そんな“見せかけの自由”にアコシュ、ペーチャ、ラチの3人は、切符に使用されているペリカン社製の青いカーボンインク《いわゆるペリカン・ブルー》を家庭用洗剤で溶かして文字を消し、カーボン紙で上書きして偽造スタンプを押印してチケットを換える方法を見つけます。公文書偽造ですね。早速、偽造した切符で西ヨーロッパへ海外旅行の旅へと出かけ、自由のシャワーを浴びて満喫した彼らは、同じ境遇の若者たちにも“チケット”を配るようになります。順風満帆に見えた計画でしたが、やがて警察の捜査が始まり国家を揺るがす大騒動へと発展していきます。

鎖国状態の監視国家であったハンガリーで、そのタガが外れた時、老若男女を問わず自国以外の国を見てみたいと思うのは至極当然なことです。当時の空気感をアニメだけでなく当時の実写映像やインタビュー音声で臨場感あふれる作品へと仕上げています。新しい映像表現に出会えて改めて映画の持つ底力に驚かされました。